

令和7年度

子どもたちの育ちと学びをつなぐ 幼保小連携

推進テーマ

～園生活から小学校へのつながりを大切に～



都田地区

池辺白ゆり幼稚園

都田小学校

推進テーマ設定の理由



・幼保小交流で顔を合わせる機会があったが、職員同士のかかわりがその時だけであり、互いの生活の様子や学びを実際に見たり聞いたりする機会がなかった。

昨年度は、取り組みの1年目として、まず、園の生活や学びを小学校が知ったり、園から小学校の授業の様子を見に来てもらったりする機会を増やし、相互理解を深めた。

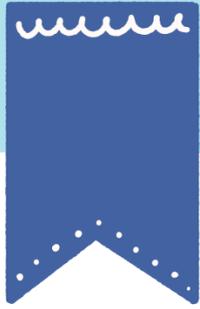
今年度も同様に職員と交流の機会を設けて相互理解の場を設けるとともに、園生活を活かしたスタートカリキュラムの実施を行った。

・小学校の全職員が、スタートカリキュラムについて学ぶことで、園生活から小学校生活へのスムーズな接続を図ることができると考えた。



推進内容

- 4月 新一年生のスタートカリキュラムの実施
- 7月 幼稚園の生活を全小学校教員が見学
- 10月 幼稚園年長児と1年生児童が公園交流
- 11月 幼稚園年長児と1年生児童が給食交流
- 12月 幼稚園の職員が小学校の授業研究会に参加
- 2月 1年生児童が幼稚園を訪問 年長児と交流
- 2月 幼稚園の園児が小学校を訪問 1年生と交流
5年生と交流（花の球根を植える）



今年度の重点課題

～今年度、力を入れたこと～



- ・お互いの園生活や学校生活について知り、職員同士の理解を深める機会を大切にする。
- ・幼児期と小学校の接続期のスタートカリキュラムの実施。園での生活を活かした子ども姿の尊重。教師の指示ではなく、子どもから生まれた疑問

活動の実際

4月 スタートカリキュラムの実施

- ・なかよし、わくわく、ぐんぐんタイムの導入
- ・園での生活経験を活かし、子どもの疑問から解決方法を考える

《なかよし、わくわく、ぐんぐんタイム》

・なかよしタイム

安心して学校生活が始められるような活動
児童が安心して過ごせる活動を準備しておく。

(例)

塗り絵、点繋ぎ、折り紙、絵本、カプラ、色ブロック、ひらがなプリント

・わくわくタイム

学校への興味・関心を学習につなげられるような活動

(例)

手遊び、読み聞かせ、歌、学校内の探検

・ぐんぐんタイム

対話的な学びや学習につなげられるような活動

(例)

運筆練習、YP、すきなものなあに



活動の実際

4月 スタートカリキュラムの実施

- ・なかよし、わくわく、ぐんぐんタイムの導入
- ・園での生活経験を活かし、子どもの疑問から解決方法を考える



4月の初めは自席で自由帳や本読みなど個での活動が多く見られました。慣れてくると2~3人の小集団や同じ園出身の児童で関わる姿がありました。

2週目が過ぎると周囲の児童と関わる場面が増えてきました。特にカプラでは個人で作っていたものから、他者と関わり楽しむ場面が増えました！



活動の実際

7月 幼稚園の生活を全小学校教員が見学

初めて幼稚園に行く職員もいた。幼稚園教諭による園内や保育室の工夫や園児の制作物の過程などを参観した。学校では学年で揃えて行う活動が多いが、園ではクラスによって内容が全然異なることに小学校側から驚きの声が上がっていた。

また、小学校教諭と園教諭でグループを作り、新年度のスタートカリキュラムを用いた週案づくりをしたり、園から保護者へ伝える小学校生活に向けて家庭で取り組んでほしいことの内容を一緒に検討をした。



活動の実際

7月 職員研修の振り返り

★幼保小との連携を密にとることで、スムーズに入学してきた子どもたちが小学校生活で本来の自分の力をもっと発揮することができるのではないかと感じた。
ただ、たくさんの幼稚園や保育園からきているので、それぞれの子どもたちの経験にも差があるだろうし、その辺りの差をどう埋めていくかについても考えていかなければならないと感じた。

★子どもが自分たちで考えて生活できるような手立てがたくさんあり、勉強になった。ペアで生活していたり、学年が上がると引き継がれること（下級生の手伝いや動物のお世話など）があり、小学校でも生かせるのかなと思った。

★保護者へ伝える内容が古かったため、アップデートすることができた。
★小学校の教室環境などを知りたいと思った。

★子どもたちが先生に言われなくても自分で動けるように、園内環境を整えていること、あまり指示しすぎずに子どもたちの力を最大限発揮できるようにすることを学んだ。これらは1年生以外にも通ずると思った。



活動の実際

10月 近隣公園にて交流

近隣公園にて公園での遊びを通して園児と小学生が交流を行った。今年度は早い時期からの交流を計画していたが、暑さの影響により10月が初回交流となった。児童は公園で見つけた秋のものを園児に紹介するところから関わりが生まれた。園児も小学生の持っている虫や木の実に興味津々で話が弾んでいた。初回の交流では、名前を聞き合う姿や児童がどんな遊びをしたいか聞く姿など、自分たちがいつも6年生にしてもらっていることを園児に向けていた。



「今度は小学校に来てね。」
「〇〇ちゃんバイバイ。」

活動の実際

10月 近隣公園にて交流



よろしくね。
名前はなんて
言うの？



よろしくね。
何してあそぶ？



鬼ごっこしたい
人おいで～



今日は楽しかったね！
！今度は小学校に来て
ね。待ってるよ。



バッタがこっち
にいるよ！！



手を離さないよう
に気を付けてね！

活動の実際

11月 小学校にて5年児童との交流

「みんなが6年生になった時の1年生になる幼稚園の友だちと交流会をするよ。」と伝えると、とても嬉しそうに計画を立て始めた5年生。限られた時間でできるだけ交流を深められるように、どんなゲームをするか、どんな活動だったら喜んでもらえそうか一生懸命考えていた。当日は雨で教室での活動になったが、「どーんじゃんけん」や「宝探し」などを楽しんだ。特に「宝探し」では、5年生が折り紙で折った宝を使った。園児は「ハートがあった！」「ピカチュウもいるよ！」と教室中に隠された宝を大はしゃぎで5年生と一緒に探していた。短い時間の交流だったが、5年生は「幼稚園の友だちが喜んでくれて嬉しかった。」「早速友達になったよ。」「また交流するのが楽しみ！」など、笑顔で話していた。

活動の実際

11月 小学校にて5年児童との交流



始めまして。
なんて名前なの？



机が大きい！



なんて
かいてあるの？



がんばれ～！！



今日は
楽しかったね！



どーん
じゃんけんぽん！

活動の実際

11月 小学校にて1年児童と給食交流

児童と園児が心温まる交流を行った。今回の交流では、児童が園児を「給食交流」に招待し、一緒に給食を楽しむことにした。児童は園児のために席を準備し、給食の配膳を手伝った。交流の中で、児童は園児に対して親切に給食の食べ方や片付け方を教える場面が多く見られ、園児は興味津々にその様子を見守っていた。児童は園児とのふれあいを通じて、思いやりや優しさを学んだ。この経験を通じて、児童はさらに園児とまた会いたいという思いを深めたようだ。交流を通じて互いに成長する姿が印象的だった。



活動の実際

11月 小学校にて1年児童と給食交流

「どこに座ったらいいか
分かりやすくした方が
いいね」

「絵があったら楽しそう」

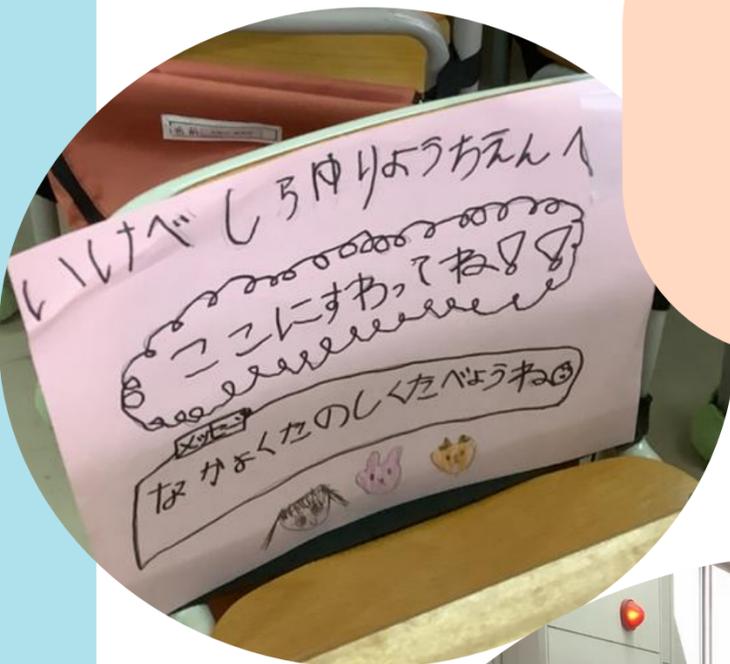
「牛乳パックは最後
こうやって開くんだよ」

「やってあげるね」

「椅子使っていいよ。
今日はどうだった？」

「また会おうね！来てくれて
ありがとう」

「今度は一緒に遊びたいな」

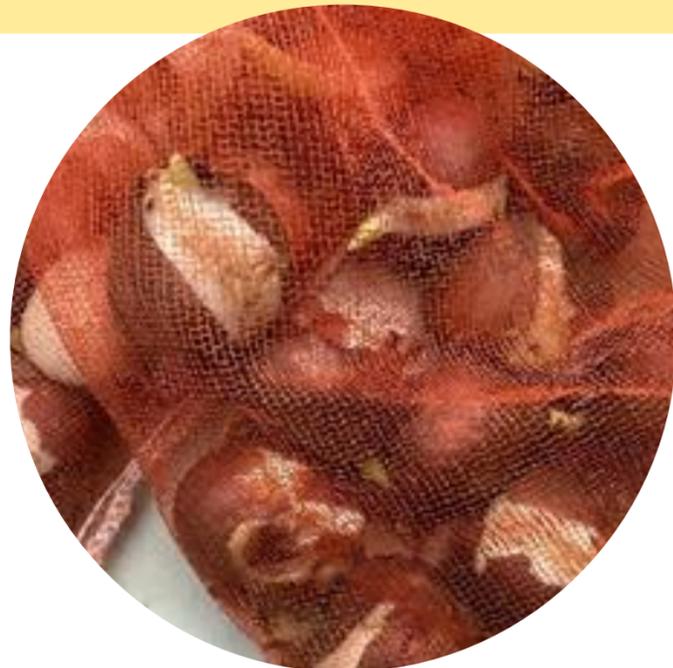


今後の活動

2月 園児が小学校を訪問

5年生と交流（花の球根を植える。）

毎年5年生は、桜の名所である江川に地域の方とチューリップの球根を植えている。そのチューリップの球根が余っていたため、どうするか話し合い、4月になるころに花が咲くので、来年の1年生のために植えようということになりました。年長児と5年生と一緒に「入学をまっているよ」の気持ちを込めて、校舎前にチューリップを植える予定。



年長さんと
植えると



江川の球根植えであまった球根を

入学頃に花が咲くよ

今後の活動

2月 園児が小学校を訪問 1年生と交流（小学校体験）

池辺白ゆり幼稚園以外の幼稚園、保育園5つの園とも交流を続けています。本年度も100名以上の園児を小学校に招き、交流を行う。事前のインタビューでは、「どんなことを知りたいか」「小学校で楽しみなこと」などを聞き、小学校のイメージが沸いたり、小学校入学が楽しみになったりできるような時間づくりをしている。小学生は一年前の自分の姿を思い出して、できることを考えていく。中でも、この一年間で自分たちができるようになったことなどを披露していききたいという思いを高めている。



成果と課題

（成果①）子どもの育ちの連続性を具体的に共有できた公園交流や給食交流など、実際の活動を通して園児と児童が関わる場を設定したことで、幼稚園・保育園で育まれてきた「主体性」「友達との関わり方」が、小学校生活につながっている様子を教職員が具体的に捉えることができた。

（成果②）小学校入学への不安軽減につながった園児が小学校の教室や児童と関わる経験を重ねることで、入学前の緊張や不安が和らぎ「学校は楽しそうな場所」という肯定的なイメージをもつ姿が見られた。

（成果③）教職員同士の顔の見える関係づくりが進んだ交流活動や事前・事後の打ち合わせを通して、園と小学校の教職員が子どもの姿をもとに意見交換する機会が増え、相互理解が深まった。

（課題①）園と小学校での子どもの見取りの視点に差がある
幼児期の育ちを十分に理解しきれず、小学校側が「できる・できない」に着目してしまう場面が見られた。育ちのプロセスを共有する視点が今後の課題である。

（課題②）連携が一部の教職員に偏りがちである
幼保小連携の取組が担当者中心となり、学年・園全体での共通理解にまで十分に広げきれていない面があった。

（課題③）入学後の指導とのつながりが弱い
交流活動は実施できたが、それを入学後の指導やスタートカリキュラムに十分に生かし切れていない点が課題として挙げられる。

今後に向けて

（方向性①）スタートカリキュラムでの接続強化

交流活動で見られた園児の姿や育ちを、小学校入学後の指導計画に反映させることで、安心して学校生活を始められる環境づくりを進める。入学直後の生活・学習の在り方について、園と小学校が連携して検討していく。

（方向性②）子ども同士の関わりを大切にした交流の充実

一方的な体験にとどまらず、園児と児童が互いに関わり合いながら活動できる交流内容を工夫し、子どもが主体的に関係を築く場を今後も計画していく。

（方向性③）連携体制の継続と広がり

担当者だけでなく、学年・園全体で幼保小連携の意義を共有できるように、情報共有の方法や参加体制を工夫する。継続的な取組とすることで、年度を越えて安定した連携が図れるようにする。

（方向性④）子どもの育ちを軸にした共通理解の深化

幼児期から児童期への育ちの連続性をより意識し、園と小学校が共通の視点で子どもの姿を捉えられるよう、事前・事後の協議の充実を図る。特に、活動の様子や子どもの変容を具体的な事例として共有し指導観のすり合わせを行っていく。

